

東海散士著『佳人之奇遇』の成立について

高 井 多 佳 子

はじめに

『佳人之奇遇』は柴四朗が東海散士の筆名で、明治十八年（一八八五）から同三十年（一八九七）にわたって全八編十六巻を東京博文堂から刊行し、当時ベストセラーとなった書物である。¹⁾現代においても、明治期政治小説の代表作としてその名を広く知られている。当時の『佳人之奇遇』の人気振りは、徳富蘆花が明治十九年（一八八六）に京都同志社に入り、後にその在学中のことを私小説『黒い眼と茶色の目』（大正三年十二月刊）に書いたことでよく知られる。蘆花は、「其頃佳人之奇遇といふ小説が出て、字を読む程の者は読まぬ者はなかった。（中略）佳人之奇遇の華麗な文章は協志社（同志社をいう…筆者註、以下同）にも盛に愛読され、中に数多い典麗な漢詩は大抵諳記された。（中略）木版片仮名まじりの字の大きい藍色の表紙をつけた和綴の其本は協志社でも其処此処のテーブルのつて居た」と記している。その一方で、大正五年（一九一六）九月の『日本及日本人』誌上では、森鷗外が「明治大正文章小史」と題した一文で、『佳人之奇遇』の「真著者」に関して言及している箇所があつて興味深い。²⁾鷗外は、「柴四朗は、大隈内閣の参政官としてよりも、東海散士の名を以て天下の耳目を聳動せしめた。其の『佳人之奇遇』は命題の甚だ陳腐なるに係らず、

文字通りに洛陽の紙価を高からしめ、其の藍色菊版形木版刷のあの冊子を知らざるものは、到底読書を談ずるの資格が無いとされた。これは我等が故郷にあって自ら経験した事実に係るものである」と記しながらも、その著者については次のように述べる。「東海散士其人は実在する、唯だ『佳人の奇遇』の東海散士は烏有子で、真著者に非ずと聞いている、誰れか此の大からくりには憤慨せざるものがあらう」と、「東海散士は烏有子」、したがって柴四朗は『佳人之奇遇』の真の著者ではないのである。さらに鷗外は、「東海散士の本物は何人か、或は高橋太華と云ひ、鈴木天眼とも云ふ、（中略）其の著想と結構の何人であったかは知らぬ、或は東海散士であったかも知らぬが、予は執筆者を高橋太華とするに躊躇しない。太華は雑誌『小国民』の主筆であった。詩章の豊麗雅馴なるのみならず、悲壮に好く、雄大に好く、筆意亦た頗る雄健であつた」と、その真の著者は高橋太華であると断言する。⁽³⁾そして、「当時『佳人の奇遇』に倣うて幾多の模倣した作物が出た、或は東海散士の名で、『東洋の佳人』と云ふものまで出たが、遂に『佳人の奇遇』の上に出づるものは無かつた、（中略）予は五六年前、柴四朗と署名した新聞寄書を読んだ。曩時の散士の気宇何ぞ卓落たる。今日の意気の何ぞ餒ゆるの甚だしき。昔時の文字の何ぞ光焰ある。今日の文章の何ぞ拙劣寒酸なる。其変化の余りに甚だしきに驚かされたが、果して東海散士は烏有子らしい」と結んでいるのである。

鷗外がこのように述べた大正五年といえ、柴はまだ存命中である。それにもかかわらず、柴四朗は『佳人之奇遇』の真の著者に非ずという説があつたのである。これに対して柴は、そして真の著者と名指されている高橋太華は、何らの弁明も行わなかつたのだらうか。

この問題について、柴と高橋太華の両名にそれぞれ面会して話を聞いたという白石寒三の記述が、『日本文学講座第十一卷 明治文学篇』（昭和九年刊）に収められている。⁽⁴⁾それによれば、『佳人の奇遇』は柴東海散士の作として知られる。が、實際は、同郷の文人高橋太華の代作だと喧伝されることも久しいものである。これについては、私は今から二

十年前（大正三、四年の頃）、所用をかねて赤坂に東海散士を訪問し、噂の真偽について軽く質した記憶がある。すると、散士は、『さあ……』と、軽く微笑されたばかりで、他を顧み、話題を転じてしまったのである」と、白石の質問に柴は言葉を濁してしまったという。では、一方の高橋太華は何と答えたのか。同じ白石の記述には、「最近、太華山人に対して同じ質問をすると、『いや、それは私の死後に真相が発表されるべきでせう。嘘は言へない、が、人の名は傷つけない』、と言って、東海散士その人も筆の立った人ですし、合作、いや、半分はお書きになったと見てよいでせうか？』、『まあ、そこらのことにしておいて下さい』、口吻から推すと、朱を入れた以上であることは察するにたかくない」とある。このように、柴はこの問題を直接問われることがあっても明確に答えない、また、高橋太華は自身が著者たるかのような言葉を洩したことが一度ならずあったらしい。(5)これでは、疑惑を招くのも無理はない。

柴四朗は大正十一年（一九二二）に七十一歳で、高橋太華は昭和二十二年（一九四七）に八十五歳で、両者ともこの問題の真相を明らかにしないまま世を去った。そのため、『佳人之奇遇』には、ながく尾を引いて代作説あるいは合作説が付随するようになったのである。

筆者は前に、『佳人之奇遇』発刊以前における柴四朗の新聞雑誌への寄稿論説から、当時の柴の思想は後年の『佳人之奇遇』に継承されるものであると論じたことがある。(6)そのうえで、『佳人之奇遇』を柴の政治論説書とみて、その思想を考察することを研究課題のひとつとしている。しかしながら、代作説や合作説のあるこの書物を、そのまま柴の書としてあつかってよいのかという問題は、最近の研究を鑑みても依然として存在している感がある。そこで本稿では、『佳人之奇遇』の成立について、この書物の代作説および合作説に関する研究史の整理を改めて行い、そのうえで、筆者の現段階での見解を述べてこの問題に一応の結論を示してみたいのである。

一、研究史の整理

(1) 著者は誰か

『佳人之奇遇』の真の著者は誰か。研究史を繙くと、代表的な研究として挙げられるのは、柳田泉氏の「佳人之奇遇」と東海散士⁽⁷⁾である。柳田氏は、「柴五郎大将(四朗弟)が、在米の散士から貰った手紙のうちに、明白にこの書の著作に触れたものがあつた。それは(明治)十六、七年頃の手紙で、そのなかには、時事に感じて政治小説を作り、これを『佳人之奇遇』と呼ぶことにしたいという意味の文句があつたという」ことを根拠として、「佳人之奇遇」の根本の構案が、東海散士のアメリカ滞在中、東洋の形勢に感慨して成つたものであることに疑いはないとする。しかし、「現実の『佳人之奇遇』を実際執筆した人については従来異説がある」として、以下の三説をあげている。

一、実際の執筆者は高橋太華氏であるという説

二、高橋氏の外に、西村天囚が助筆し、殊に詩は、西村の手に成るという説

三、武田範之が先ず漢文で筆し、これを東海散士が和訳したものであるという説

柳田氏はこれをふまえて、高橋太華に書簡を送り真の執筆者について尋ねたという⁽⁸⁾。「然し高橋氏は、散士なき今日、自分のみが『佳人之奇遇』の著者だとは勿論明答されない。然し自身が関係のあることは否定されなかつた。だが、二の西村天囚の手伝いと、三の武田範之説は、明白に打ち消した」とあつて、つまり西村は「欄外の批評を書き、跋文を認めてくれた位」のもので、「小説の本文には何の關係もない」、武田には『佳人之奇遇』を「漢文訳させてみた」が、「武田は小説家ではなし、忙しくもあるしで、巧くまとまらず」、これより先に、亡命中国人梁啓超による漢訳が出たので中止したという回答であつたという。この回答を得た柳田氏は、高橋太華の「潤飾刪正」の程度は「恐らくかなり深

く立ち入って、ただに文辞上だけのことでなく、構案の或る部分、人物の捻出、場面の点綴等にまで及んだものにちがいない」と推論しながらも、「妥当なのは、柴氏立案乃至原稿、高橋氏増訂」であり「著者は誰ぞという問題に對しては、やはり柴東海散士と答えて一向差し支えない」と結論している。

その後、大沼敏男氏は、前述の第三点に挙げられる武田範之の関わりについて、松沢哲成氏の指摘（「武田範之」『アジア主義とファシズム』所収、れんが書房新社、一九七九年）に基づき、武田の『洪疇遺蹟』を再調査した。⁽⁹⁾ その結果、武田範之宛の柴四朗書簡の日付から、巻十一（明治三十年七月刊）以降には「武田の加筆の可能性がある」ことを明らかにしている。そこで大沼氏は、柳田氏への（「武田の関与を否定した」）太華の回答にもわがには信じがたく、前掲の三名を含めて作者に擬せられている人物とこの作品の關係は、予想よりも深いものがあると考えられよう」として、「この作品が『名文』として読まれ、作中の漢詩が好んで『朗唱』されたという事実、すなわち表現とその享受との観点からすれば、部分的な文章の潤飾の意味も看過出来ず、その程度によつては合作の可能性が出てくるのは当然であろう」と述べている。

木下彪氏は、『佳人之奇遇』巻九巻頭にある東海散士自序の言によつて、「『佳人之奇遇』は小説だが、全体が文と詩を以て成り、文の作者と詩の作者は初から別である。だから作者問題の一半とは、詩の作者は誰かという問題である」と指摘し、その詩の作者とは国分青厓であると断定している。⁽¹⁰⁾

そもそも、『佳人之奇遇』巻一巻頭にある東海散士「自叙」における「多年客土ニ在リ、国ヲ憂ヘ世ヲ慨シ、千万里ノ山海ヲ跋涉シ、物ニ触レ事ニ感シ發シテ筆トナルモノ積テ十余冊ニ及ヘリ、是レ皆偷閑ノ漫録ニシテ、和文アリ漢文アリ、時ニ或ハ英文アリテ、未タ一体ノ文格ヲ為サス、今年帰朝、病ヲ熱海ノ浴舎ニ養ヒ始テ六句ノ閑ヲ得タリ、乃チ本邦今世ノ文ニ倣ヒ之ヲ集録削正シ、名ケテ佳人之奇遇ト云フ」との言をみれば、この書物が柴四朗の体験と知識をなく

して誕生し得ないことは明らかである。⁽¹¹⁾したがって、『佳人之奇遇』が完全なる代作ということはない。

では、柴と高橋太華の二名による合作なのかといえ、そうとも言い難いのである。なぜならば、卷九自序には、「諸友ノ評論」が加えられた『佳人之奇遇』原稿を「一詩宗」に送り「評正」を求めたことが記されている。⁽¹²⁾実際に『佳人之奇遇』には、各巻の龍頭に複数人によるとみられる漢文評が載せられていて、刊行までに幾人かの手を経ていることが知られる。さらに、『佳人之奇遇』には一部分ではあるが稿本が残っており、そこには複数人の手による添削の跡が確認できるのである。この稿本とはどのようなものなのか。次に稿本からみた合作説について整理しておく。

(2) 合作説

『佳人之奇遇』の合作の問題についての研究には、大沼敏男氏の「『佳人之奇遇』成立考証序説―慶応義塾図書館蔵稿本と刊行本―」がある。⁽¹³⁾大沼氏は、『佳人之奇遇』稿本（慶応義塾図書館所蔵）と刊行本との比較対照を通して、「『佳人之奇遇』は、散士が第一次稿本を執筆し、他人に添削と漢文評類を依頼し、それを本文と共に転写し、更に添削を加えていくと言ったような複雑な過程を基本パターンとしてたどり、刊行に至ったものと考えられる」と述べ、その添削について次のように概括している。

一、漢詩で稿本成立後から刊行までの間で挿入されたものが目立ち、また原案の漢詩の入れ換えがある。

二、文章、字句の推敲、特に風景描写など、プロットに直接関与しない箇所がより整った「美文」調に直されている。

三、注や典故類の削除、増補が見られる。

四、政治的意見、他国の政治情勢や歴史などの記述に増補及び削除が認められる。

そのうえで大沼氏は、「現存する稿本の散士の筆跡を確認し、また残りの稿本が全て発見されぬ限り、散士自身の手にな

る推敲がどれほどなのか判明し難いが、稿本生成過程を鑑みれば他者の筆によるものが相当存在すると考えてよいだろう。とするならば、『佳人之奇遇』を合作とみなすのが妥当か否かを問う前に、まず前掲の諸点の表現機能（作品享受のされ方を含めて）を如何にテキスト全体の中で位置づけるかという作業が不可欠になってくる」と述べる。

その後、井田進也氏は、大沼氏の合作説をもとに「合作の可能性があるとしたら、それがどのように行われ、どの『程度』に達していたかを稿本そのものに即して確かめ」として、「現存する稿本の浄書本文や欄外に加えられた朱筆、墨筆の主が誰であるか、東海散士、高橋太華、武田範之の筆跡ならびに筆癖の両面から検討」している⁽⁴⁾。その結果、柴と高橋太華には、「送り仮名ほか推敲方針をめぐって両者の間に静かな確執があった」と指摘し、「巻三、巻四と巻を追うにしたがって、稿本そのものの中で散士が次第に遠景に退いてゆく印象は否みがたい」と述べる。また、武田範之の関与については、その独特の筆癖が巻九に見られることから、大沼氏が指摘した巻十一（明治三十年七月刊）より遡って、「早くもこの時期（巻九は明治二十四年十一月刊）から関与していることが判明する」とある。

現在まで、『佳人之奇遇』稿本をあつかった研究は、この大沼、井田両氏によるもの以外にはない。しかしながら、両氏がそれぞれ特定する柴四朗筆跡が異なることをはじめとして、未だ考証されるべき問題を多く残している。既に述べたように、『佳人之奇遇』が複数人の手を経て刊行されたことは疑いがなく、その関与の程度によっては、合作説をとる必要が出てくるであろう。『佳人之奇遇』稿本が存在し、それによって添削過程をみることできるならば、まず稿本自体を詳細に検討する必要がある。そのうえで、稿本上にどのような添削が加えられているのかを検討し、さらに稿本から刊行本へ貫かれる柴の思想を考察することが必要となろう。次章では、大沼、井田両氏の研究をふまえつつ、筆者が改めて『佳人之奇遇』稿本の調査を行って得た見解を述べることにしたい。

二、『佳人之奇遇』稿本

(1) 現存する稿本

慶応義塾図書館が所蔵する『佳人之奇遇』稿本は全七冊である。⁽¹⁵⁾ そのうち、『佳人之奇遇草稿 卷一初稿』、『佳人之奇遇草稿 卷一卷二再稿』、『佳人之奇遇草稿 卷二』、『佳人之奇遇草稿 卷四』、『佳人之奇遇草稿 卷十』と題された五冊は、いずれも原稿用紙を裏打ちし、茶色表紙を付して同じ装丁で和綴に製本されている。さらに同様の装丁で、『佳人之奇遇草稿 筋書』と題された一冊があり、これには服部撫松著『通俗佳人之奇遇』との類似点を挙げた「筋書」と、刊行本では卷九巻頭にある東海散士自序の草稿が綴じられている。⁽¹⁶⁾ もう一冊は、『佳人之奇遇卷九』とある草稿が無野の紙に蒔莢印刷されて紙紐で綴じられたものであり、これには他の六冊のような装丁は施されていない。

これらの稿本は、それぞれ浄書本文に朱筆、墨筆で添削が加えられているものである。まず、稿本中にみられる柴四朗の筆跡について述べておく。ただし本稿では、浄書本文における柴自身の筆跡の特定は行わないことを断っておきたい。それは浄書を意識した場合の柴の筆跡が判明せず、現段階では明確に特定することができないからである。大沼氏は部分的に柴自筆であると断定するが、別人とされる浄書者の筆跡が異筆かどうか疑わしい場合もあり、果してそうかは疑念が残る。井田氏は大沼氏の見解には異論を唱えている。⁽¹⁷⁾ 今のところ筆者が指摘できるのは、添削文字の一部については、書簡等に見られる柴四朗筆跡との比較から、柴の自筆と断定できるものがあるということである。⁽¹⁸⁾

『佳人之奇遇』は全八編十六巻、つまり二巻を一編とする(表1参照)。したがって、まず現存する稿本について、その刊行経緯を考慮して二巻を一組として考察をすすめたい。本稿では、稿本の添削箇所、および稿本と刊行本における異同箇所を逐一追うことはせず、先行研究では言及されていない点を中心に述べていくこととする。なぜならば、先行

《表1》

刊行本		稿 本		備 考
初編	卷一	刊行年月日	『佳人之奇遇草稿 卷一初稿』 『佳人之奇遇草稿 卷一巻二再稿』 『佳人之奇遇草稿 卷一巻二再稿』	
	卷二	明治18・10・28	『佳人之奇遇草稿 卷一巻二再稿』 複数人による添削 (柴自筆を含む)。	
二編	卷三	明治19・1・13	『佳人之奇遇草稿 卷三』 柴による推敲本。	
	卷四	明治19・1・13	『佳人之奇遇草稿 卷四』 柴による推敲本。	
三編	卷五	明治20・2・4		高橋太華宛柴四朗書簡(柴ウィーンより草稿送致、加筆依頼)。
	卷六	明治20・2・4		柴、卷八を自身の「政治上の意見」とす。
四編	卷七	明治20・12・24		西村天囚が関与か。
	卷八	明治21・3・24		
五編	卷九	明治24・11・24	『佳人之奇遇 卷九』 菊弱印刷。朱筆漢文 評および添削は刊行 本に採用されず。	
	卷十	明治24・12・9	『佳人之奇遇草稿 卷十』 複数人による添削 (柴自筆を含む)。	
六編	卷十一	明治30・7・30		武田範之宛柴四朗書簡(加筆依頼)。
	卷十二	明治30・7・30		
七編	卷十三	明治30・9・14		
	卷十四	明治30・9・14		
八編	卷十五	明治30・10・19		
	卷十六	明治30・10・19	『佳人之奇遇草稿 筋書』 合綴される巻九自序 は柴自筆草稿。	

※刊行本の刊行年月日(初版)は筆者所蔵刊行本による。稿本はすべて慶応義塾図書館所蔵。

研究においては、文章表現および小説プロットに関わる添削に関しての検討、および考察に比重がおかれているからである。筆者の関心はそういった事よりも、他者によって行われた添削は、柴四朗の思想をおびやかすものであったかどうかということにある。したがって、大沼氏が第四点に挙げた「政治的意見、他国の政治情勢や歴史などの記述に増補及び削除が認められる」添削について特に注意して、『佳人之奇遇』成立過程において柴の思想がどれほど貫かれているのかということを検討していきたい。

初編（巻一卷二）について、稿本は「巻一初稿」と「巻一卷二再稿」が現存する。⁽¹⁹⁾したがって、巻一稿本には、「初稿」と「再稿」の二種類が存在することになるが、定稿成立までに作られた稿本はこの二種類だけではなかったとみられる。現存する稿本から刊行本における変化も認められるので、現存するものが最終稿とはいえない。前掲巻九自序にも、「抑初篇ヲ公ニスルニ当リ、出版ノ自由ヲ得ザルガ為ニ稿ヲ更ムルコト十余回」とあるように、現存する稿本だけで添削過程のすべてを明らかにすることは不可能なことではあるが、今回は、まず稿本上の添削がどう行われているのか、さらに稿本から刊行本における過程でどのような変化がみられるのか、この二段階の過程を考えていくこととする。

巻一稿本は二種類が現存するので、文章がより美文調に練り上げられていく様子をよく知ることができる。大沼氏は『佳人之奇遇』冒頭の文章の入念な添削過程を検討して、「この文章を散文として引用するには、大きな問題が存する」と述べる。だが、文章表現に関わる以外の添削の程度はどうかを検討すると、巻一稿本においては、稿本上の添削でも稿本から刊行本における変化をみても、語句、文章の異同、割注の増補や削除、史伝の追加などはみられるが、そこで述べられる「政治的意見」そのものを添削する箇所は認められない。

巻二稿本では、幕末維新期の政治情勢から会津藩の「亡国」を述べていく部分（刊行本では十三丁目裏から十九丁目裏にかけて、以下丁数は刊行本による）に注目すべき朱筆の書込がある。それは「此ノ一綴ハ御改正ノ後チニ妄評スベ

シ、請フ大ニ刪除アランコトヲ」とあって、「此ノ少シ前ノ御守護職以来ノコトハ、ヨク太一郎様（四朗長兄）ト御相談ナサレ、今少シ簡略ニシ激烈ニ過ギザルヤウ意味ヲ含蓄シテ御記載ノ方ナランカ、当時ハ忌諱ニ触ル、ヤウノコトハナキ筈ナレトモ、其実ハ然ラズ、最モ他藩人ノ記スルナレバ可ナレトモ、御同前ヨリ云フ時ハ少シク斟酌スベキニ似タリ、何如」と稿本の内容に対して警告を発しているのである。この部分が果して朱筆の主が警告するように、「改正」あるいは「刪除」され、「今少シ簡略ニシ激烈ニ過ギザル」ように改稿されたのかを検討してみる。

まず稿本上の添削であるが、削除線が何カ所かあって添削されている。その内、語句や文章の単なる異同を除くと、「当時幕政苟且庸人権ヲ弄シ機謀ノ士ハ退ケラレ慷慨有為ノ士ハ罪セラレ」という文が、「幕府三百年承平ノ後ヲ受ケ政苟且ニ流レ」と添削されていて、これが刊行本にそのまま採られている。したがって、この部分はやや控えめな表現に改められているといつてよい。これ以外に、ここでもっとも添削が施されているのは、会津藩の女性の辞世の句が挿入される部分（十八丁目裏）であり、刊行本までには辞世句がさらに差しかえられていて、添削者が入念にこの部分の添削を行ったことがわかる。このことは、添削者の重きをおくところが「文学的表現」に関わるものであったことを如実に物語っているともいえる。あとはほとんど改稿らしい改稿は認められない。

稿本から刊行本における変化を検討してみても、幕末の会津藩主松平容保の役割を述べる「政治的意見」や、戊辰戦争時における会津藩の悲劇を悲憤慷慨調に述べる部分はほとんど改稿されてはいない。語句の異同こそあるものの、大きな改稿は認められず、刊行本には稿本の思想がそのまま貫かれているといつてよい。そしてまさしく貫かれたからこそ、この部分には巻九自序にあるように「稿成リテ之ヲ剗削全ク工ヲ終ヘテ塗抹セザルベカラザルノ不運ニ遭遇」した箇所があるのである。稿本に、

（稿本では「朝廷」、刊行本では「朝臣」が主語となる）却リテ我ヲ責ムルニ違勅ノ罪ヲ以テシ、世人挙リテ我レヲ目スルニ国

ヲ売ルノ姦臣トナシ、内ハ庸臣命ニ托シテヲ以テ 輕僑ノ徒 字内ノ形勢ニ暗ク、朝政ヲ操ミテ攘夷ノ詔ヲ下スコト星火ヨリモ急ナリ、蓋シ先帝ノ深意ニ非サルナリ真

とあるところが、刊行本では「出版ノ自由ヲ得ザルガ為」(巻九自序)に検閲にかかり黒く塗りつぶされている。最終稿の本文がどのようなものであったのかを知ることができないが、他の部分の添削の程度から推察すれば、この箇所も稿本の内容にそう手は加えられていないものとみられる。またそうであつたからこそ黒塗されてしまったのである。

巻二稿本にはもう一箇所、同じ朱筆の主による次のような書込がある。それは、世界情勢を説く箇所(十九丁目裏)の欄外に、「此一段ハ外交上ニ關係シテ甚タ不可ナリ、若シ此ノ儘上梓セバ、必ズ罰セラル、ノ上ニ絶板ニセラレン、以下ニモ往々海外交際國ノ惡シキコトヲ説キタル所アリ、皆改メザルベカラズ」とあつて、朱筆の主はここでも稿本の内容について警告を発しているのである。それは「甚タ不可」であつて「皆改メザルベカラズ」と、ここでの警告は先程より一層強い語調となつてゐる。この部分についても「改メ」であるのか検討してみる。

この朱筆書込のある次の丁には柴の筆で欄外に書込がある。そこには「亜細亜北部ハ強俄ノ為ニ并セラレ、南方印土ハ英王ノ臣妾ト為リ、安南ハ仏國ニ内附シ、土耳其、清國モ萎微、既ニ已ニ亡滅ノ運ニ傾向セリ、嗚乎、鯨鯢浪ヲ蹴リテ東洋ヲ縦横シ、豺狼食ヲ求メテ戸外ヲ窺フ」と記されていて、これを本文に挿入するよう指示がある。刊行本では「仏國ニ内附シ」が「仏國ニ隸屬シ」となる以外は、この文をほぼそのまま採用している。これが、朱筆警告の後に挿入されたものかどうかはわからないが、柴によって、アジア諸國の危機的状況をより一層強調した世界情勢の描写が増補されていることが明らかである。

そして、この部分にも再び検閲によつて黒く塗りつぶされた箇所がある。数回の添削の跡がみられる稿本では、

(稿本も刊行本も「噫」)外人英人々英公使カ先帝ノ詔ヲ裂テ地ニ擲チ、或ハ公会ニ杯盤ヲ蹴テ我ヲ凌辱シ、独國兵艦ノ我國禁ヲ犯シ、蹂躪シ疫癘為メニ蔓延セシ、我ガ同胞兄弟數万ヲシテ父母ヲ離レ姉妹ニ訣レ、空ク黄壤ノ幽鬼トナラシムルガ如キ、実ニ堪ユ可

カラザルモノナリ、而シテ我レ之ヲ奈何トモスルコトナシ、加之ナラズ、外人ノ我カ国法ヲ蔑視シ、

〔抹消〕「我カ条約改正ヲ肯ビザル數年」
我婦女ヲ姦スル奥行万状、若シ之ヲ忍フ

〔抹消〕「約ニ背キ我カ条約改正ヲ拒避シ、彼我カ良民ヲ欺キ」

〔欄外柴加筆〕

「彼レ約ニ背キテ我カ条約改正ヲ拒避シ、良民ヲ欺キ我カ婦女ヲ姦スル奥行万状至ラザル所ナシ、而シテ我レ之ヲ天ノ正理ニ照ラシ法庭ニ訴ヒ、猶ホ曲ヲ蒙ルニ到ル、若シ之ヲ忍ブベクンハ」

可クンハ何ヲカ忍ブ可カラザラン、志士苦ニ寝ネ戈ヲ枕ニシ此國辱ヲ雪メズンハ後世子孫其レ我ヲ何トカ云ハン

とあるところで、これも前と同様に最終稿の本文はわからないが、黒塗されたことを考えると、この段階とほぼ同様の内容であつたとみられる。⁽²⁰⁾「海外交際國ノ惡シキコトヲ説キタル所アリ、皆改メザルベカラズ」との警告が無視された結果であることは明らかである。そればかりでなく、欄外柴の加筆によつて、英国人の横暴がより強調される文が何度も練られていることがわかる。

同じ部分の稿本から刊行本への変化もみておくが、これは、他者の添削によるものなのか、柴自身の推敲によるものなのか判断がつかないことを予め断つておく。日本国内の様子を述べる部分（二十一丁目裏）に、「中央集権重キニ過キ、地方其鈞ヲ失ヒ、帝京ニ非サレハ事ヲ起シ名ヲ拳クル能ハス、悠悠タル奔競ノ士、政府場外ニ別ニ名利ノ余地アルヲ覺ラス、皆官途ニ狂奔シテ偏ニ租税ニ衣食センコトヲ願フ」という文が増補されている。また興味深いのは、「大難ヲ救済挽回スルノ策」（国権恢復策）を述べる部分に、刊行本（二十三丁目表）では「外人ノ移住ヲ奨励シ外国ノ資本ヲ利用シ、古來国人カ漫ニ官爵ヲ重シテ天爵ヲ輕シ、清貧ニ傲テ商利ヲ賤ムノ陋習ヲ破リ」とあるのが、稿本の段階では「兵ヲ講シ武ヲ習ヒ、陸ニハ星壁ヲ堅フシ海ニハ戰艦ヲ備ヘ、馬ニ秣ヒ劔ヲ磨キ、欧人カ跋扈ヲ制シ我國國權ヲ復シ」という文であつたということである。ここでは、武力による国権恢復を述べる稿本の方に、柴の思想が強く顯れているとみら

れる。

さて、二度にわたって稿本の内容に警告を発する朱筆の主であるが、井田氏は、その筆跡からも散士の長兄「太一郎」を知っていることから「同郷の後輩」高橋太華であると断定する。それについては筆者も異論はない。ただし、井田氏は「ここで興味あるのは、太華が検閲を回避するためとはいえ、著者たる散士の最終稿に対しても、なおかつ『妄評スベシ』⁽²²⁾といったはばからないことである」と述べるが、それよりもここで重要なのは、いくら太華が「妄評」しようとも、結局、この稿本が述べるところが大きな改稿もなく刊行本に採用されたということである。なおかつ、検閲にかかり黒塗された箇所がある事実をみれば、それは太華以外の他者の添削を経ても、最終的には真の著者である柴四朗の思想が貫かれたことになるといえるのである。

二編（巻三巻四）について稿本は、「巻三」と「巻四」が現存する。これも稿本から刊行本における変化が認められるので、いずれも最終稿ではない。その変化は、語句、文章の異同について改稿が認められる程度で、思想的な内容におよぶものではない。大沼氏は、巻三巻四稿本はともに「散士直筆稿本」とするが果してそうか。前に述べたように井田氏は異論を唱えている。くり返しになるが、浄書本文における柴の筆跡について現段階で推論することは控えたい。しかしそれよりも、この巻三巻四稿本が先にみた巻一巻二のそれと大きく異なるのは、この稿本に朱筆で施された添削がすべて同一人の手で行われたものだということである。しかもそれは、その筆跡から柴自身によって行われた推敲の跡であることが判明することなのである。⁽²¹⁾

巻三稿本で特筆すべきは、ポーランド亡国論が展開する部分（九丁目表から十七丁目表にかけて）における削除線の高さである。⁽²²⁾この部分はポーランドの英雄「高節公」（コシチューシコ）の史伝と、ポーランドの滅亡は人民の「自由ノ誤解」が引き起こしたものであると説くところである。これは大沼氏の言う「政治的意見、他国の政治情勢や歴史など

の記述に増補及び削除が認められる」部分に相当するであろうが、述べたようにこの削除は柴自身の判断であることを考慮する必要がある。ただし、柴が自身の草稿を推敲して削除しているのか、それとも一旦他者の手になったものを削除しているのかはわからない。ただこれが何故の削除なのかを考えてみると、削除されたのはポーランド亡国論の中でも歴史的事実を述べた箇所であることに気付く。余りに長すぎた感のある歴史叙述の大幅削除は、高節公の史伝とポーランド亡国論を強調するために行われたのではないだろうか。あるいは、ポーランドの歴史叙述は他者の草稿であるのかもしれない。しかしながら、削除線をひいて「政治的意見」を強調するものに推敲しているのは、柴自身であることに注意を要したいのである。

次に巻四稿本を検討してみると、巻四はその大部分が幽將軍救出劇の顛末を述べる小説的展開となっていて、本文において「政治的意見」はほとんどみられない。稿本は、語句、文章の異同に関わる推敲に止まるものである。ただし、これも巻三稿本と同様にすべて柴自身が朱筆で行った推敲の跡なのである。したがって、巻三巻四稿本が柴による推敲本である事実を鑑みれば、井田氏が述べるような「巻三、巻四と巻を追うにしたがって、稿本そのものの中で散士が次第に遠景に退いてゆく印象」は、筆者は抱き得ないのである。

この次に稿本が現存するのは、五編（巻九巻十）である。巻九刊行本の巻頭にある東海散士自序は、五編の執筆経緯について次のように述べている。それは、巻九巻十は明治二十二年冬に執筆し、「諸友ノ評論」が付された草稿を「一詩宗」に送って「評正ヲ需メ」た。しかし、その「詩宗」は「性檢束ナク猖狂阮籍ノ如シ、乃チ稿本ヲ高閣ニ束ネ数月闕セズ」放置していたらしい。そこで、これを促すと「九巻ト十巻トヲ合セテ既ニ之ヲ紛失セリ」との答えが返ってきた。⁽²³⁾「幾多諸友が勞評スル所、散士が多少心血ノ濺ギシ所」であった草稿を失った落胆の余り、数カ月間、筆を執ることができなかったが、「再ビ旧想ヲ追懷シ」執筆したというのである。

この言によれば、卷九卷十の稿本は、紛失前のものと紛失後のものと二種類が存在したことになる。前に述べたように、卷九稿本は草稿を蒔莢印刷したものである。これは、稿本紛失後に再び複数人に添削あるいは漢文評を依頼するため、数部を印刷して配布したものであったとみられる。つまり、現存する稿本は、前記の「詩宗」が紛失した後に「再ビ旧想ヲ追懷シ」執筆されたものになるのであろう。

卷九稿本には、表紙裏に添削者による朱筆の自筆識語がある。⁽²⁴⁾ 稿本にはその識語と同じ筆跡によって、朱筆で上欄に漢文評が加えられ、本文には添削が加えられている。しかし、この稿本は柴の手元には戻らなかったのだろうか。大沼氏が指摘するように、この漢文評および添削は刊行本にまったく採られていないのである。⁽²⁵⁾ したがって、現存する稿本上の添削はここでは省き、稿本と刊行本との比較だけをしておく。

稿本から刊行本における変化で顕著なのは、条約改正をめぐる議論（二十八丁目裏から三十三丁目裏）が増補されている点である。これが他者の添削によるものなのか、柴自身の増補によるものなのかかわからないので何とも述べ難い。しかしながら、条約改正問題は柴が関わり続けた問題である。この記述が詳細になっていることは、それが他者による添削の結果であったとしても、柴と同じ意識を持つ人物が周辺にいたということになろう。そしてそれを柴も積極的に採り入れたのである。

次に卷十稿本は、再び卷一から卷四稿本までと同じ体裁で、浄書本文に朱筆、墨筆で添削が加えられているものである。卷十にも卷九と同様に蒔莢印刷版の稿本が存在したのかどうかは定かではないが、現存の卷十稿本は刊行本と比較してもほとんど異同が認められないので、恐らくこれも紛失後の稿本とみられる。井田氏は「卷十稿本には散士の筆跡は見られず」と述べているが、表紙裏には柴自筆とみられる書込が確認できる。それは、刊行本鼈頭の漢文評に関して、「此評第一」とその配列順を指示して漢文評を写しているものである。同じ表紙裏には、「是^レ乃^チ未^タ抑^々彌^々唯^々皆^ナ夫^レ

（以下略）」など送り仮名の用例（確認のためか）を羅列した書込もあり、これも同じく柴の筆とみられるのである。

まず稿本上の添削であるが、日清戦争の利を説く部分（十七丁目裏）に添削、削除部分が若干認められるが、いずれも文章表現の効果に関わる添削であり、そこに述べられる「政治的意見」をおびやかすものにはなっていない。大沼氏も、「現存稿本は刊行本と比較してみると、全く同一のものと言える程異同が少ない」、「朝鮮問題を中心として政治的意見を述べるに終始する巻十は小説的プロットに乏しく、その為もあつてか加えられた添削も著しく少ない」と指摘する。とくに巻十は朝鮮問題を取りあつかう重要な巻である。「政治的意見」を述べるのは柴の役割であるから、ここには添削の必要がなかったのであり、それ故にこの巻には添削が極めて少ないのである。

以上、現存する稿本上の添削と、稿本から刊行本における変化を検討することによって、『佳人之奇遇』成立過程において柴の思想はどれほど貫かれているのかを検討してみた。添削に「政治的意見」、他国の政治情勢や歴史などの記述に増補及び削除が認められる」という問題であるが、後者はともかく「政治的意見」は、少なくとも稿本文の思想、つまり柴の思想が貫かれているといつてよい。

（2） 現存しない稿本

次に、稿本が現存しない部分について、稿本以外の史料から『佳人之奇遇』成立過程を検討してみる。

三編（巻五巻六）が刊行されたのは、農商務大臣谷干城の秘書官となった柴が、明治十九年（一八八六）三月から翌二十年六月にかけて谷の欧米視察旅行に随行中で、日本には不在であった時期にあたる。巻五巻頭にある増島六一郎の序によって、柴が増島に留守中の『佳人之奇遇』続編の刊行を託した事実が知られる。⁽²⁶⁾

この三編の執筆に関しては、注目すべき次のような高橋太華宛の柴四朗書簡が残っている。⁽²⁷⁾ それは、柴がウィーン滞

在中に投函した明治十九年八月二十日付の書簡で、「扱佳人之奇遇五ハ既ニ送致セリ、六モ此兩三日、谷中將ノ留守ニ逢ヒ漸ク埃及ノ事ヲ終レリ」と、巻五草稿を既に送ったこと、そして巻六も近日中には成稿することが記されているのである。これによって、巻五、巻六ともに柴によって第一稿が執筆されていたことが明らかとなる。続けて同書簡には、「然レトモ腹枯レ文章ハ鈍ク、復昔日ノ筆ニ非ラス、貴兄代リ改正古刪シテ急ニ出版セラレン事ヲ乞フ、評論序跋ニ二甲^ア（早）稲田兄（四朗長兄太一郎、早稲田南町に住居があつた）ト貴兄トノ尽力ニ任ス、故ニ責任モ又貴兄ニアルヘシ、貴兄ノ費ハ早稲兄と相談シテ増島（六一郎）ヨリ取ルヘシ」とあつて、柴が太華に草稿の「改正古刪」を一任していることが知られる。さらに柴は、書簡本文の竜頭に、「埃及ノ史余リ長シ、宜シク之ヲ短シ文章ヲ鍛鍊セラレンコトヲ乞フ」と書き込んでおり、太華に文章の「鍛鍊」を依頼しているのである。先に述べたポーランドの歴史叙述の削除を想起すれば、「史」を長すぎるまで執筆するのは柴の癖と考えることもできよう。柴自身が外遊中の身であり、直接刊行に携へることができないという理由にもよるのだろうが、すべてを一任しているこの書簡からは、柴が高橋太華に対してかなり深い信頼感を抱いていることがわかる。それは柴が同書簡で、「近來ハ頻リ二世ノ中カイヤニ相成リ、一本ノ筆ヲ以テ須摩明石^{マサ}辺ニテモ退隱シ、一世ノ功名ヲ著述ニ尽サンカノ念起レリ、貴兄之レ我ニ随ヒ共ニ天年ヲ樂ムノ意ナキヤ否ヤ」と述べていることからもうかがうことができる。

ここで近日中に成稿するとある巻六草稿が、同様に柴から日本へ送られたことは、やはりウィーンから投函された同年十月六日付の柴五三郎（四朗三兄）、高橋太華両名宛の柴四朗書簡にみえる。柴はウィーンを訪れた鳥尾小弥太から「佳人之奇遇」に寄せた序文を得たらしい。「扱、別紙鳥尾中將ノ序差出候間、過日送届候佳人之奇遇第六卷ノ序ニ御入レ被下度奉願候、尤モ書ハ何人ナリトモ宜敷ク御座候間、宜敷様御取計被下度、過日佳人之奇遇ノ第六之正稿ハ早稲田ニ書キ留ニテ差上候間、必ラス御落筆ノ事ト奉存候、若シ然ラレハ御吟味ヲ乞フ」とあつて、巻六草稿は既に日本へ送ら

れていることがわかるのである。⁽²⁹⁾

この二通の書簡はいずれも、『佳人之奇遇』第一稿は柴自身が書いていたという『佳人之奇遇』成立過程の濫觴を明らかにするものに他ならない。と同時に、柴と高橋太華との親密な関係を知らしめてくれるものでもある。十歳の年齢差のある柴と高橋太華の関係はどのようなものであったのだろうか。後年、太華自身が次のように記している。⁽³⁰⁾ 太華は、「小生と柴氏とは、極めて懇親の間柄にて殆ど兄弟とも舅甥とも申すべき交情の中に於て、同氏の殆ど全部の著作及出版に就て助手之役を力め候事として、唯佳人之奇遇之著作に就てのみ小生之同氏を補助したと申すにては無之、文筆以外之事に於ても一家人として、又同氏之最も久しく厚き恩情に浴しつつ、同氏之指示之下に微力を致し候事に候」と述べていて、両者の交流の様子を想像することができる。柴と高橋太華の関係を考えることなくして、『佳人之奇遇』の成立過程を論じることはいないのである。

同じく稿本が現存していない四編（巻七巻八）の執筆について、やはり柴と高橋太華の関係に関して、井田氏による次のような指摘がある。明治三十八年（一九〇五）六月に、高橋太華が『天囚批評 東洋之佳人初稿』（慶応義塾図書館所蔵）と題する稿本に付した、東海散士著『東洋之佳人』（明治二十一年一月刊）の刊行経緯を回想した自筆識語がある。その識語の冒頭の文に、「此稿（『天囚批評 東洋之佳人初稿』）は明治二十年八月に成る、当時余は柴東海に伴はれて暑を清見寺に避け、佳人之奇遇六編続稿を艸す、山寺清三郎を従ふ、山寺は会津産独眼矮小二十許、細字を工にし米粒にいろは四十八字、又は五言絶句を書す、又詩才あり、絶句を作る、此行主として余の草稿を浄写す」とある。このことから井田氏は、「同年（明治二十年）二月には出ていた巻六の『続稿』（すなわち巻七以下の草稿）は太華自身が『艸』したもので、その際山寺を興津清見寺に伴ったのは、太華の『草稿を浄写』させるためであった」と述べ、柴の存在を無いものとしてしまふ。だが果してそうだろうか。この避暑行が太華単独の行であったならば、そのような解釈も可能

であろう。しかし、太華は「柴東海に伴はれて」清見寺へ赴いたのである。太華自身が、柴に伴われる存在であったのだということを今一度考えておかねばならない。

そして、明治二十年の夏が、柴四朗にとつてどんな意味を持つ時期であつたかを考えねばならない。同年六月、欧米視察旅行によつて一層政府批判を強めて帰国した谷干城は、内閣に政治外交政策刷新の意見書を提出して翌七月に農商務大臣を辞職した。秘書官柴も谷とともに辞職し、その後、清見寺に仮寓した。そこで、『佳人之奇遇』四編（巻七巻八）は執筆されたのである。そのため、この編には大いに政府批判が盛りこまれたのであつた。その詳細は、拙稿『佳人之奇遇』を読む―小説と現実の「時差」―に譲りたいが、この編のうち特に巻八は柴自身が重要な意味を持たせている。⁽³²⁾ 明治二十五年、第二回総選挙において柴が立候補した際、柴は『佳人之奇遇』巻八は自身の「政治上的意見」であると述べたのである。⁽³²⁾ まさしくこれは、柴がこの巻に存分に自身の「政治的意見」を込めたからこそ発せられた言葉である筈である。したがつて、『佳人之奇遇』六編統稿」は太華だけが「艸」したのではない。太華が「艸す」と言うのならば、柴も当然「艸」しているのである。太華が「余ノ草稿」と述べたとしてもそこに深い意味はないのである。なぜならそれは、柴と太華によつて練られた草稿に違いないからである。⁽³³⁾

高橋太華は、児童文学者、雑誌編集者として名を残した。太華の業績中で最も多数を占めるものは歴史読物であり、このうちのほとんどは人物を中心とした史伝である。⁽³⁴⁾ 『佳人之奇遇』稿本における歴史上の人物の史伝や、各国の歴史叙述の記述に訂正増補がみられるのは、太華の実証主義的傾向のあらわれともいべきものがあるのかもしれない。そしてその文章については、柴四朗の「東洋美人ノ歎」（『東京日日新聞』明治九年十一月二十四日）が太華によつて『東洋之佳人』として再生されたことを鑑みても、鷗外が指摘する通り太華の色合が強いと言わざるを得ないだろう。⁽³⁵⁾ しかしながら、既に述べたように、『佳人之奇遇』稿本を見る限りにおいて、太華の加筆は柴の思想的な内容にまでおよぶもの

ではなかったといえるのである。

ところで、四編（巻七巻八）に関わった人物として西村天囚の名を挙げておくことができる。⁽³⁶⁾ 木下彪氏は、天囚の没後に滝川君山が『碩園先生追悼録』に寄せた一文に、「東海散士の『佳人之奇遇』七、八巻及び『東洋之佳人』も亦碩園（天囚）の潤飾批評せし所なりといふ」とあることを指摘している。先に述べたように高橋太華は、西村は「本文には何の關係もない」と柳田氏に回答したというが、実際のところはどうか。追悼文を寄せた滝川は、『佳人之奇遇』巻十の「書後」を書いた人物であることが巻十稿本によって知られる。⁽³⁷⁾ となると、自身も関与した当事者である滝川が述べる西村の関与の話は、「七、八巻」と巻数を限定していることも含めて信憑性を帯びてくるのではないだろうか。

最後に、六編（巻十一巻十二）、七編（巻十三巻十四）、八編（巻十五巻十六）については、刊行年月日が近接していることとその内容から、これらの執筆は一挙に行われたものとみられる。巻十が刊行されてから六年の間隔がある。明治二十五年二月、第二回総選挙で初当選し衆議院議員となつて以降の柴は、政治家として国内外の問題に奔走していた。柴の身辺も慌ただしくなり、刊行に至る背景もこれまでとは変化があつて当然である。

この編の『佳人之奇遇』成立について、今の段階で指摘しておくことができるのは、先に述べた武田範之の関与である。⁽³⁸⁾ 大沼氏によれば、『洪疇遺蹟』所収の武田範之宛の柴四朗書簡で、最も早い日付のものは、明治二十九年（一八九六）二月二十九日で、「本日迄多忙ニテ円機括法モ寄遇ノ草稿モ打棄候筈、明日ニモ可相送候」とあるもので、「この時点で、『佳人之奇遇』の未刊行分は、巻十一（明治三十年七月刊）から巻十六（同三十年十月刊）の六巻であるので、武田の加筆の可能性があるのは巻十一以降」との指摘がある。この書簡も第一稿は柴の側から送られていることを示している。他に武田宛の柴書簡をみると、「佳人之奇遇ノ草稿ハ充分ニ御作正置ヲ乞フ」（同年三月二四日）という依頼、「御申越ノシャミールノ伝ハ一字下テ、恰モガリバルチー又ハ東山党ローハチールノ書キ方ニ相願度、成ル丈長文ニ御敷演

ヲ乞フ」(同年十月二十一日)という執筆箇所についての具体的な指示が確認できる。さらに、同三十年四月三日付の武田宛の柴書簡には、「御尽力被下候佳人之奇遇モ刪正スレバスル程六ヶ敷相成候テ、加之議會其他人事多要ノ為放棄シ置処候処、一大奮発シテ発兌致度存候ニ付、御上京被下候事相成ルベク候ヤ」とあつて、柴は『佳人之奇遇』刊行のために武田の上京を要請している。これらの書簡からは、先にみた柴と高橋太華との関係が、この時点では柴と武田範之との間に築かれていた様子をうかがうことができるのである。⁽³⁹⁾ 武田の関与については、先に述べた井田氏の指摘による巻九から関与の可能性も含め、改めて論じるべきこととしたい。

おわりに

文学書としてみたとき、『佳人之奇遇』は合作であるといわねばならないのかもしれない。⁽⁴⁰⁾ しかしながら、これを思想書としてその思想を議論する場合、それは柴四朗の思想なのであり、その限りにおいて『佳人之奇遇』は柴四朗の著作と考えて問題はないといえる。なぜならば、基底となつてゐる体験と知識は柴四朗自身のものであり、他者による添削がみられる稿本において、その添削が思想内容にまでおよんでいる場合を確認することはできないからである。なおかつ、残された史料から常に柴が第一稿を執筆していることは疑いようがないからである。

しかしながら、この書が複数人の協力を得て成立したこともまた事実である。今後の課題としては、高橋太華、西村天囚、武田範之、その他の『佳人之奇遇』の成立に関与したと考えられる柴四朗の周辺人物の思想的な問題を併せて検討していく必要がある。そのためには、『佳人之奇遇』鰐頭漢文評の検討もすめねばならないと考える。

未だ課題は残るが、『佳人之奇遇』は柴四朗の思想が貫かれた政治論説書である、これを以て本稿の結論としたい。

註

- (1) 『佳人之奇遇』の内容については、拙稿『佳人之奇遇』を読む―小説と現実の「時差」―（『史窓』第五八号、京都女子大学史学会、二〇〇一年）を参照されたい。
- (2) 湖上人（森鷗外）「明治大正文章小史」（『日本及日本人』臨時増刊、政教社、大正五年九月二十日）。
- (3) 高橋太華・文久三年（一八六三）～昭和二十二年（一九四七）：児童文学者、小説家、雑誌編集者。本名次郎。号は高橋七郎、太華山樵、頽花学人など。岩代（現福島県）二本松の旧藩士の家に生れる。明治十四年（一八八一）上京、中村正直、重野安繹に学び、詩文を修める。同二十二年、少年雑誌の先駆となった『少年園』を創刊、さらに『小国民』を創刊した。根岸党（根岸近傍に住んでいた洒脱な気質の文人達）の一員と目され、饗庭篁村、幸田露伴、岡倉天心等とも交流があった。
- (4) 白石実三「根岸派の人々」（『日本文学講座第十一巻 明治文学篇』所収、改造社、一九三四年）。
- (5) 飯田利行『佳人之奇遇』の筆者について（『二松学舎創立百十周年記念論文集』二松学舎、一九八七年）は、飯田氏が昭和十七年（一九四二）八月十日に高橋太華を訪問した当時を回顧して、同氏の記録に「散士作と伝えられる政治小説『佳人之奇遇』と『東洋之佳人』は、先生の筆になったものだ、このとき承る」とあり、「私は、太華翁が、問わず語りに、ふと漏らした言の葉に真実がこもっていたと信ずる。たゞしプロットというか、構想というか、それは東海散士柴四郎によるものと解したい」と述べる。
- (6) 拙稿「東海散士柴四郎の政治思想―政治小説『佳人之奇遇』発刊以前―」（『史窓』第五六号、京都女子大学史学会、一九九九年）。
- (7) 柳田泉「『佳人之奇遇』と東海散士」（『政治小説研究 上』春秋社、一九六七年）。
- (8) 柳田氏がこの問題を調査したのは、高橋太華が存命中の昭和五年（一九三〇）である。堀田信夫『東洋之佳人』稿本並びに高橋太華関係書簡（慶応義塾大学研究会編『国文学論叢第五輯 近代文学』至文堂、一九六二年）には、同年十一月十六日付の柳田泉宛の高橋太華書簡が翻刻されている。

- (9) 大沼敏男『佳人之奇遇』成立考証序説―慶応義塾図書館蔵稿本と刊行本―(『文学』岩波書店、一九八三年九月)。
- (10) 木下彪『佳人之奇遇』の詩と其の作者(『文学』岩波書店、一九八五年九月)。木下氏は、『佳人之奇遇』中の「三十首の詩を熟読して、其の声調、其の辞藻から考へて、これが全く同一人の手に出たものであることは殆んど疑を容れない」と、書中の詩はすべて国分青崖作とするが、これについては疑問が残る。
- (11) 『佳人之奇遇』巻一(明治十八年十月刊)巻頭に「明治乙酉(十八年)三月於熱海浴舎東海散士誌」と署名のある「自叙」による。柴四朗は同年一月に六年間のアメリカ留学を終えて帰国した。
- (12) 『佳人之奇遇』巻九(明治二十四年十一月刊)巻頭に、「東海散士謹識」と署名のある自序による。
- (13) 大沼前掲論文、以下の大沼論文の引用はすべてこれによる。
- (14) 井田進也『東海散士』佳人之奇遇』合作の背景―慶応義塾図書館蔵稿本を読む(『国文学 解釈と教材の研究』学灯社、一九九九年十月)。
- (15) 薄井恭一『稿本『佳人之奇遇』との奇遇』(『日本現代文学全集 第三巻 政治小説集』月報所載、講談社、一九六五年)によれば、これらの稿本は、昭和二十二年暮に白木屋古書展において薄井氏が購入したものとある。その時点ですでに現状の装丁があつたという。稿本を目にした嘉治隆一氏から、この稿本は昭和十九年に武田範之が住職をつとめた越後顯聖寺で見たことがある、柴五郎から寺へ納められたものでもあろうか、という話があつたことが記されている。この話が事実ならば、これらの稿本の所有者が武田であつた可能性も考えられる。
- (16) 明治二十年二月に、「大東萍士」を主人公として『佳人之奇遇』のストーリーをほぼ踏襲し平易な通俗文体によって書きかえた、服部撫松著『通俗佳人之奇遇』(東京同盟書房)が出版された。同二十二年四月十四日、柴はこの「通俗本」を自己の版權を侵害する偽版として告発、第一審では被告の服部は無罪となるが、同二十三年五月二十九日、大審院が服部に有罪を宣告した。この「筋書」は裁判の参考資料として作成されたものであろうか。また「筋書」と一緒に綴じられる巻九自序草稿は、筆跡から柴四朗自筆のものと考えて問題ない。
- (17) 井田前掲論文、以下の井田論文の引用はすべてこれによる。井田氏は、「現存する稿本中では筆耕X(草書風の細目の

達筆)の美麗な筆になる部分が分量的にはもっとも多く、大沼氏はこれを『散士直筆』としておられるが、この説には承服しがたい」として、「どうやら稿本中の乱筆ないし悪筆をもって散士直筆としなければならないようである」と述べる。

- (18) 例えば、高橋太華宛柴四朗書簡(慶応義塾図書館所蔵)、谷干城宛柴四朗書簡(立教大学図書館所蔵)などに見られる柴自筆との比較が可能である。これらにより、『佳人之奇遇草稿 筋書』に合綴される巻九自序草稿が柴自筆のものと断定できるのである。

- (19) この二つの稿本は、大沼氏の指摘によって、「初稿」と称されている稿本は「再稿」の巻一に相当する丁の本文を、そこに加えられた欄外朱筆及び墨筆の増補文などを本文に繰り込みつつ転写したものであることが明らかにされている。つまり現存の「初稿」は再稿で、「再稿」が初稿になる。

- (20) 薄井恭一氏所蔵の稿本から原本(刊行本)の伏字を復元したとある『日本現代文学全集 第三巻 政治小説集』(講談社、一九六五年)には、欄外柴加筆部分「約ニ背キ：若シ之ヲ忍ブ」が見落されてしまっている。

- (21) 先行研究にはこのことは指摘されていない。

- (22) 稿本の行数であるが、計三十九行に削除線があつて大幅削除が目を書く。

- (23) 前掲木下論文は、この草稿を紛失した「詩宗」が国分青厓であると論証している。以下の木下論文の引用はすべてこれによる。

- (24) 添削者による自筆識語には署名がない。「両声寂々、灯火栄々、空齋起臥、不堪無聊無止、乃把尊稿敢加鄙見、可採則採可刪則刪、若夫彫琢文詞闡發微旨、散士固不乏其友、敢非吾儕所望諒焉」とある。

- (25) 添削者識語には「明治二十四年」五月初一日灯下」と日付がある。巻九自序では大津事件(同年五月十一日)以前には定稿が出来ていたとある。よって、この稿本の添削者は、定稿完成までにこの稿本を返送することができなかったものとみられる。

- (26) 『佳人之奇遇』巻五巻頭に増島六一郎による序がある。増島は弁護士、法学者。序文には「今年春散士欧米に遊ぶ、発

するに臨み余に託するに此書出版の事を以てす、頃者第五卷成る」とある。

(27) 前掲堀田信夫『東洋之佳人』稿本並びに高橋太華関係書簡。

(28) 同右。柴五三郎の関与については、村上兵衛『守城の人―明治人柴五郎大将の生涯』（光人社刊、一九九二年）に次のような叙述がある。「日本語の文章に関しては、四朗はあまり自信がなかった。そこで（『佳人之奇遇』草稿を、そのころ上京していた三兄の五三郎の許に届け、流麗な漢文調の文体に磨きあげてもらった。ずっとのちのことだが、この小説の続編の草稿を前に、五三郎が机にむかつて呻吟している姿を五郎は目撃している」とある。

(29) 鳥尾の序は柴の指示通り、巻六巻頭に「佳人之奇遇序」、「明治十九年秋十月於澳国首都得庵居士撰」として挿入されている。

(30) 柳田泉宛高橋太華書簡。註（8）参照。

(31) 註（1）前掲拙稿。

(32) 『日本』（明治二十五年一月三十一日）の記事に、「東海散士、奥の会津の候補者たり、一日、政治上の意見を述べて曰く、予が意見は佳人之奇遇第八巻に同じと、自著の小説を把って宣言に代ふ、亦奇」とある。

(33) さらに井田氏は、『卷九刊本巻頭の散士自序草稿が、『東洋之佳人初稿』と同じ大振り、右肩上がりの特徴とする山寺筆の謄写本として巻十稿本の巻頭に綴じ込まれていることは、巻七から巻十までの草稿が、明治二十年の夏、太華によって清見寺で『艸』せられ、山寺によって浄書されたことを裏書きするのではあるまいか」と述べるが、「第一編ヲ出セシヨリ以テ今日ニ至ルマデ已ニ六星霜」と述べ、明治二十二年冬に巻九巻十は成稿したと述べる巻九自序が、明治二十年のこの行で浄書されるということは起こり得ない。

(34) 上田信道「高橋太華の児童文学―史伝とお伽話を中心に」（『児童文学研究』第二十六号、日本児童文学学会、一九九三年）。

(35) 『東洋之佳人』が高橋太華の執筆になることは、『天囚批評 東洋之佳人初稿』の太華自筆識語によって明らかとなる。前掲堀田信夫氏は、『東洋美人ノ歎』の趣旨は其の俤『東洋之佳人』に採り入れられているが、後者に至ってその文辞

は顯かに華麗となり、その構想も著しく文芸作品の形を帯びて来ている。此処に散士と太華との作品を通じての關係が判然と言えらるであらう」と述べる。

- (36) 西村天四・慶応元年（一八六五）→大正十三年（一九二四）……新聞記者、小説家、漢学者。本名時彦。晩年は碩園と号す。父は薩摩藩の支藩種子島家の上士。明治十三年上京し、重野安繹の内弟子となり宋学を修めるかたわら、島田篁村の双桂精舎に入つて経学を学んだ。明治二十年五月、『屑屋の箴』前編を博文堂から出版、一躍文名を馳せた。翌年、滋賀県大津の『さ、浪新聞』に主筆として入社、その後『大阪公論』、『大阪朝日新聞』に移り、日清戦争後は『東京朝日新聞』主筆となった。

- (37) 卷十稿本卷末には漢文の「書後」が淨写されている。刊行本では無署名の同文が掲載されるが、稿本には「辛卯（明治二十四年）十月十五日 滝川資言」の署名がある。滝川亀太郎（諱は資言、号は君山、東洋史学者）は、高橋太華、西村天四とは東京大学古典講習科の同期であつた。

- (38) 武田範之・文久三年（一八六三）→明治四十四年（一九一）……久留米藩士沢四郎兵衛の三男として生れたが、十一歳の時に福岡の武田家の養子となつた。京都、東京に出て曹洞宗・天台宗を学び仏門に入り、やがて越後顯聖寺（新潟県東頸城郡川原村）の住職、曹洞宗末派総代議員にもなつたが、朝鮮における大陸浪人的な活動で知られる。天佑俠・黒竜会・一進会などの団体の中心的メンバーとしておもに日本の朝鮮合併工作に従事した。

- (39) 井田氏は、「柳田氏への返書で太華が武田の直接関与に触れなかつたのは、卷九、卷十の稿本が失われたのをさかひに、潤飾のヘゲモニーが太華から武田に移つたこと（とりわけ太華がすでに手を入れていた印刷稿本に武田が椽大の筆を揮つたこと）へのわだかまりが残つたためかもしれない」と推論する。

- (40) 木下彪氏は、『佳人之奇遇』とても、文はどの部分を誰が代作したとか助筆したとか、詩は誰がどれを作つたとか直したとか、そんなことを一一弁明する必要はないのである。それが問題になつたのは、文も詩も余りに巧く出来てゐて、本は空前のベストセラーになつた為である。同書の出た翌年、末広鉄腸の政治小説『雪中梅』、次で『花間鶯』が出て、これ亦随分広く読まれた。鉄腸は朝野新聞朱筆として鳴らした論客である、余技にものした小説の原稿は、必ず其の道

の専門家に就いて正した。『雪中梅』『花間鶯』も、文中の婦女子の對話が如何にも巧み過ぎるといふので、代作説が起った。それを聞いた鉄腸は『餅は餅屋、婦女子の言葉など、前田鶯園に訂正を託したのだ』と虚心坦懐に自白したといふ。東海散士は鉄腸のやうにはいかなかった、それが明治文学史上の問題となつて今に尾を引いてゐるわけである」と述べる。

〔付記〕 本稿作成に際し史料閲覧の許可をいただいた慶応義塾図書館貴重書室に記して謝意を表します。